

清水小 校長室だより No.24

2019. 10. 31(木) 文責：筒井

明日から霜月(しもつき)です

10月も今日で終わり、明日から11月です。今年の月別カレンダーも残り2枚です。

年末になると『師走』(しわす)と言う言葉を耳にするとおもいます。昔から日本には、今使っている1月～12月という言い方の他に、その月を表す言葉があります。

11月は『霜月』(しもつき)と言います。意味は、ずばり「霜が降り始める月」です。

昨日も職員室で「夕方5時過ぎたらもううす暗いねえ。」と話していましたが、日の暮れはどんどん早くなり、夜の明けるのは、どんどん遅くなります。この時期は、交通事故も多くなります。できるだけ明るい内に家に帰るようにしましょう。

クールビズも今日で終了です。明日から、ネクタイの生活になります。



(ハロウィーン 今日)

洪水&氾濫・・・自然の脅威を思う

台風15号、台風19号、そして先日の低気圧による大雨が立て続けに東日本に来襲した。東京、神奈川、千葉、長野、新潟、宮城、福島・・・多摩川、千曲川、信濃川、阿武隈川・・・東日本を流れる有数の河川が氾濫した。住宅街や農地、工場地帯が広大に浸水し、泥水の『海』が広がった。

清水でも平成13年(2001年)9月の大雨で、宗呂川、貝ノ川等が氾濫して、下川口や貝ノ川地区に大きな被害を出した。この大雨は【高知西南豪雨】と名付けられた。

この災害の時に、下川口や貝ノ川に連日後片付けの応援に行った。重たい畳や泥だらけの家財を運び、家の床を剥ぎ、床下を水で洗った。過酷な作業だった・・・しかし、テレビで観る今回の被災状況は、その比を大きく上回っている。

もしも自分が同じように被災したら、自分たちの力で復興できるだろうか?そんな話を妻とした。

近年災害の巨大化や狂暴化を実感する。「百年に一度」あるいは「数十年に一度」の災害が、頻繁に起きている様に感じる。地球温暖化をはじめ、様々な原因が言われているが、これまで経験したことがないような災害が、いつでも、どこでも起こりうる。加えていつ発生してもおかしくない南海トラフの地震への備えも同様だ。

そのための備えは、ハード面もソフト面もまだまだ不十分だ。

自然災害から あれこれ

その1

先日の新聞に掲載された中学生の投稿。

お母さんに「避難するから、大事な物をバックに詰めて」と言われた。

「大事な物ってなんだろう」とあれこれ考えたが、本当に何が大事な物なのか、思い浮かばなかった。・・・避難後、結局一番大切なものは、普通の当たり前の生活なんだということに気がついた。」



(研究授業5-1 今日)

その2

立て続けに災害に遭い「もう、どうしようもない・・・」と途方にくれるニュースが流れていた。その時三浦綾子さんの「泥流地帯」が頭に浮かんだ。

——「泥流地帯」三浦綾子著——

1926年(大正15年)の十勝岳の噴火を題材にした小説。舞台は北海道上富良野、活火山十勝岳の山麓に広がる農村地帯で開拓農家の人々は毎日クワを振るい、雪に閉ざされる冬は出稼ぎをしながら懸命に実直に生きている。そこに襲いかかる火山爆発という自然災害。

三浦綾子は、農村に生きる人々の姿を描き、十勝連峰・大雪山系の雄大な自然風景と、牙をむいた自然の猛威に翻弄されながらも、力強くあきらめずに生きる人達を丁寧描いた。

テーマは『試練～なぜ人は苦難に遭うのか』真面目にひたむきに生きているのに、なぜこんなひどい目に遭うのか、自然の前に無力な人間と自然の恩恵、そして、そこに立ち向かう人間の優しさと強さ。答えのないこの大きな問いに真正面から挑んだ作品。秋の夜長に推薦の一冊。

□泥流地帯 1977年(昭和52)3月25日発行

北海道新聞日曜版連載 1976. 1/4～ 9/12

□続泥流地帯 1979年(昭和54)4月15日発行

北海道新聞日曜版連載 1978. 2/26～11/12

ショック! 首里城が焼けた

今朝は、あいさつ運動だ。いつも6年生が中心になって呼びかけてくれる。あいさつ運動をしながら『首里城が焼けたがで。』『まだ、燃えよった。』『首里城いっちゃったにー。』と、話題に上がっていた。さすが6年生だと思った。

首里城は沖縄を代表する観光名所であり、琉球王国の歴史上貴重な建造物。世界遺産でもある首里城は沖縄の象徴であり、かけがえのない存在だ。

火災の原因はまだ不明だが失った『首里城』は二度と戻らない。返す返すも残念でたまらない!